

第XVI期うきたむ学講座（2024年度）

第1回講座

講座①

『天蚕繭の生産という生業』

置賜民俗学会会長 守谷 英一 氏

令和7年2月2日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

「天蚕繭の生産という生業」

しらたか天蚕の会 守谷英一

「天蚕繭の生産という仕事は、私にとって楽しく喜びのある仕事です」

1 天蚕（てんさん）について

- ・天蚕はヤマユガという日本在来種の蛾。繭をとるために人に育てられているもの。
- ・一般的なカイコ（家蚕）とちがって、野生のカイコで、野蚕（やさん）といわれるものの1種。
- ・幼虫はブナ科のナラ、クヌギ、コナラ、クリ、カシ、カシワ、ミズナラなどの葉を食べる。
- ・天蚕糸は萌黄色の独特の光沢を持ち、絹に比べて軽くて柔らかいのが特徴。

2 白鷹町での天蚕繭生産の歴史

- ・長野県安曇野市穂高有明では、天明年間（1781年 - 1789年）から天蚕飼育が始められた。
- ・白鷹町では昭和63年（1988年）から深山、中山地区で生産が始まる。
- ・下火になってきた養蚕に変わる生業の創出。特産品化による地域作りを目途とした。
- ・深山地区の役員、養蚕農家で「白鷹町天蚕推進会議」を組織して、繭の生産は「生産者部会」で生産に取り組んだ。
- ・生産された繭は、町内の織物業者に引き取ってもらって、織物にされた（繭1個70～100円）。
- ・織物の販売先に苦勞することから、繭の引き取りが難しくなる。また繭生産者の高齢化が問題になる。
- ・平成19年（2007年）、「天蚕飼育組合」を解消し、繭生産者、繰糸作業、織物業者からなる「しらたか天蚕の会」を組織し、繭生産、繰糸、織布を一貫して行う団体にする。
- ・「しらたか天蚕の会」の現在の会員は個人14人と「本場米琉織物工業協同組合」1団体となっている。
- ・毎年、鮎貝小学校、蚕桑小学校児童を対象として、天蚕見学会を開催している。
- ・会員の高齢化、会員数の減少は会として重大な課題である。
- ・これまでの年次毎の繭の生産量については後の資料で示してある。

参考

平成18年（2006年）までの平均	天蚕飼育組合時代
放飼卵数	18,774個
収穫繭数	8,158個
収繭率	43.5%
平成19年（2007年）以降の平均	しらたか天蚕の会時代
放飼卵数	7,489個
収穫繭数	2,179個
収繭率	29.1%

3 天蚕繭生産の1年

月	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月			1月			2月			3月					
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
飼育場施設管理																																							
飼育木管理																																							
天蚕飼育																																							

飼育場管理の主な作業

<ul style="list-style-type: none"> ・飼育場パイプフレームの補修作業 ・飼育場の除草、草刈り作業 ・飼育木への肥料散布作業 	<ul style="list-style-type: none"> ・飼育木への薬剤散布作業 ・飼育木の剪定作業 ・飼育場防鳥網、電柵設置 など
---	--

天蚕飼育の主な作業

<ul style="list-style-type: none"> ・採卵、保管作業 ・孵化調査 ・飼育木への山付け 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼虫の成長管理 ・繭の採取、選別 ・繭の乾燥 など
--	--

4 卵から繭になるまでの作業

作業項目	作業内容	時期	備考
採卵	採卵用繭を弁別し、親蛾が羽化したらオスとメスを一緒にして採卵籠に入れる	8月上旬～9月中旬	飼育場で羽化した親も捕獲して採卵籠に入れる
卵採取消毒	採卵籠から卵を外して、洗浄と消毒する。その後自然乾燥する。	2月下旬	受精卵、不受精卵の選別も行う
卵の保管	自然乾燥させた卵を冷蔵庫で保管。	3月中、下旬	山付けまで孵化を遅らせるため
山付け	保存していた卵を、100個程度紙テープに貼り付け、飼育木の枝に取り付ける。	6月上旬～中旬	カエルの食害を避けるために6月15日までにしている。
幼虫の成長	天蚕幼虫は孵化してから、4回脱皮し、5齢になると繭を作る。	6月上旬～8月上旬	天蚕は野生なので、孵化時期や成長度合いはバラバラである。
食害虫の駆除	食葉を食害する、シャクトリムシなどを、手で駆除する。	5月下旬～8月上旬	食害虫はシャクトリムシ、ウスムラサキイラガ、コナラナメクジバエなど。
幼虫の移動	食葉が不足した木から他の木へ幼虫を移動する。	7月上旬～8月上旬	特に5齢期の幼虫になると食葉が不足する。
繭の収穫	繭を作って1週間程度の繭から収穫する。	7月下旬～8月中旬	手で触ってある程度固いものだけ収穫する。

5 生業（サブシステム）としての天蚕繭生産

- ・「生業」とは、「生計を維持するために行われる仕事。職業が指し示す内容よりも幅広く、収入に直接結びつかなくても日常生活を支える上で欠くことができない仕事をも含めている（湯川、1999）。①生計を維持する仕事 ②日常生活を支える上で欠くことができない仕事 が「生業」
- ・しらか天蚕の会での繭生産の賃金は、作業時間の時給で支払われる。
- ・基本的に、繭を収穫し、糸にして、その糸を織り反物にして販売しなければ収入にならない。
- ・多くて年に10万円ぐらいの収入である。
- ・上記の「生業」の条件に照らし合わせると、主要な「生業」とはいいいにくい。
- ・文化人類学などでは、「生業」には「マイナー・サブシステム（「遊び仕事」）というものも含まれていると考えられている。
- ・それは、生計を維持するための主要な生業にはなりえない、つまり経済的意味はさほど大きくない生業のことであり、しばしば伝統的な活動で、採取から消費までの過程が短く、自然との密接なかかわりのなかでおこなわれ、高度な技術を用いず（ゆえに人びとが保有する技法によって成果が左右される）、楽しみや喜びといった情緒的価値をもたらすものである。また、活動の場は空間的あるいは時間的に限定されており、人びとの努力によって成果が大きく変化するような性質のものではない（松井、1998）というものである。
- ・天蚕繭生産には、幼虫が育ってゆく姿を見る楽しみや、伝統的な織物技術を使った織物生産の一部を担っているという喜びがあるものである（守谷私感）。
- ・現状では、天蚕繭生産は、上記の「マイナー・サブシステム」に近い性格を持つ「生業」だといえよう。

6 天蚕繭生産の生業としての可能性

※主要な生業としてではなく、「複合的な生業（合間の仕事の複合）」の一部になる可能性を探る

- ・繭の生産拡大は、反物市場が縮小しているため、販売が難しくなるため、必ずしも成功ではない。
- ・最大でも、1年に1反の布生産が限度か。
- ・年間に4,000個を上限として繭の生産を考えてゆかなければならない。
- ・仕事量は分散的で、しかも突発的傾向がある。
- ・したがって、下記のような課題を解決することが必要である。
- ・2、3人が年間10万円程度の賃金で従事することに、意欲を持たせることができるか。
- ・半分ボランティアで活動する喜びと満足感をどのように与えることができるか。
- ・職業生活のなかに、どのように位置づけてことができるか。

主な参考文献

栗林茂治, 1990, 「生活史」 赤井弘・栗林茂治編『天蚕』サイエンスハウス 8-17

松井健, 1998, 「マイナー/サブシステムの世界 -民俗社会における労働・自然・身体」 篠原徹編『現代民俗学の視点1 民俗の技術』朝倉書店 217-246

湯川洋司, 1999, 「生業」 福田アジオ他編『日本民俗大辞典』吉川弘文館 925-926

資料1 天蚕繭の収穫量

年	和暦	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年
	西暦	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
放飼卵数		8,000	11,000	10,800	6,400	25,000	12,500	20,000	42,000	22,000	20,000
収繭数		3,913	2,807	6,188	2,996	12,686	5,477	8,252	16,556	8,701	9,610
収繭率		48.9%	25.5%	57.3%	46.8%	50.7%	43.8%	41.3%	39.4%	39.6%	48.1%

年	和暦	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年
	西暦	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
放飼卵数		20,000	28,000	21,000	21,000	20,000	20,000	25,000	12,000	15,000	10,000
収繭数		8,627	11,241	7,601	8,442	9,000	9,000	11,000	5,500	6,300	1,650
収繭率		43.1%	40.1%	36.2%	40.2%	45.0%	45.0%	44.0%	45.8%	42.0%	16.5%

年	和暦	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年
	西暦	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
放飼卵数		9,000	5,000	8,000	5,000	10,000	5,500	5,000	5,000	7,000	9,000
収繭数		3,720	1,650	3,200	1,550	4,100	2,100	2,000	2,000	2,700	4,000
収繭率		41.3%	33.0%	40.0%	31.0%	41.0%	38.2%	40.0%	40.0%	38.6%	44.4%

年	和暦	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年
	西暦	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
放飼卵数		3,000	9,500	12,000	7,000	5,800	13,000	6,000
収繭数		300	2,564	2,300	1,000	1,515	1,750	1,127
収繭率		10.0%	27.0%	19.2%	14.3%	26.1%	13.5%	18.8%

資料2 1年間の天蚕繭生産作業暦

月	作業内容	2023年度	備考
4	・飼育木雪囲いはずし	4/5	
	・飼育木消毒薬散布	4/14	
	・除草剤散布		
5	・殺虫剤散布	5/11, 12	
	・飼育場草刈り		集団作業
	・飼育場パイプフレーム補修	5/13	集団作業
	・肥料散布		
	・飼育木消毒薬散布		
	・防鳥ネット張り	5/13, 30	集団作業
	・電柵設置	5/30	
・フレーム部分、電柵周辺除草剤散布	5/13		
6	・飼育場草刈り	6/19, 27	
	・保存卵孵化調査	6/5~19	
	・卵の山付け	6/10	集団作業
	・食葉食害虫駆除	6/15~	
	・幼虫の成長状況確認	6/12~	
	・フレーム部分、電柵周辺除草剤散布	6/25, 7/29	
	・侵入鳥の排除		集団作業（必要ない場合も）
・伸びすぎた枝の剪定	6/16~		
7	・飼育場草刈り	7/8	集団作業
	・食葉不足木から幼虫の移動	6/29	集団作業の場合もある
	・食葉害虫駆除	6月から継続	集団作業の場合もある
	・侵入鳥の排除	7/5, 17	集団作業（必要ない場合も）
	・伸びすぎた枝の剪定	6月から継続	
	・繭の収穫	7/29~	集団作業
8	・食葉不足木から幼虫の移動	~8/2	集団作業の場合もある
	・食葉害虫駆除	6月から継続	集団作業の場合もある
	・侵入鳥の排除		集団作業（必要ない場合も）
	・伸びすぎた枝の剪定	6月から継続	
	・繭の収穫	~8/17	
	・繭の選別	8/24	集団作業
	・親蛾から採卵	8/3~	
	・飼育場での親蛾の捕獲	(9月中旬まで)	
・繭の乾燥	8/25~27	集団作業	
9	・繰糸作業	(9月中旬)	繰糸機械の設置、撤去部分のみ
	・飼育木食害虫の確認、駆除	6月から継続	
10	・飼育場ネット、電柵外し	10/3, 14	集団作業
	・除草剤散布	10/3	
	・飼育木消毒	10/19	
11	・飼育木剪定	11/29	集団作業
12			
1			
2	・保存卵の選別、洗浄	2/14	集団作業
3	・保存卵の冷蔵庫保存	2/28	